2024 年度（令和 6 年度）常磐大学高等学校 自己評価表

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
国語科	自国の文化への興味・関心を持たせる	・資料や映像を用いて視覚的に興味を持たせ、古文への無関心を改善し、苦手意識をなくすための授業内容の充実化を図る。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は、国語科にとって転機のある年であったと感じる。特に、共通テストでの大門三(実用的文章)の追加が大きかった。予想問題が少なく、また初年度のため傾向も読めず、対策にかなり苦勞した。次年度以降は、1年生の段階から対策を心がけ、対応していきたい。データの読み取りは国語以外の要素を多く含んでいると感じるため、他教科と協力をし、教科横断型での対応も考えていきたい。 ・国語科は全体としてあまり密なコミュニケーションが取れていないと感じる。会議を定期的に行うなど、できる限りコミュニケーションを取る機会を増やし、もっと教科内で連携を取れるようにしたい。 ・外部の研修や学習会への参加率も低く感じるため、積極的に参加するように促していきたい。
	知識・技能の定着	・読解法や解答法を段階的に示し、自分がどのように読んだり考えたりしたのかをチェックし、ペアで相互に説明させることで、技能の定着を図る。	A	A	
	読書への興味関心および思考力・表現力の育成	・教材に関連する本を紹介し、発展学習に繋がられるようにアドバイスをする。	B		
		・小論文などの指導において、読書を通して得た知識を基に自らの考えを確立し、相対する意見を踏まえながら論述する手法を習得させる。	A		
	自らの学習を調整しながら粘り強く学びに向かう態度の養成	・ロイロノートを活用して授業の復習をしたり、スタディサプリの授業動画で授業の補強を行ったりさせることで自主的に学習する力を養う。	A	A	
		・定期的に振り返りを行い、学習を通して培った読解力がどのような段階に達しているかを自己分析し、目標を明確にして読解に取り組ませる。	A		
データ読み取り能力の育成	・実用文読解に向けて授業でデータに触れ、データ読解力を養う。	B	B		
地歴 公民科	基礎学力の定着と理解の深化	・基本的な知識の習得の徹底を、個々の学習状況に応じて綿密に行う。 ・授業にリフレクション（振り返り）の時間を設け、生徒の学習状況を細かく把握して指導につなげる。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒自らが知識を習得したいという授業づくりを心がけていく。 ・定期考査などの短期の目標だけでなく、より長期的な目標や学習過程を意識させられる計画・振り返りを実践していく。 ・ICT教材を活用して、意見を共有する時間を充実させ、生徒が新たな視点に気付く授業を展開したい。 ・グループワークの中で、生徒自らが問い立てる時間を必ず確保する。
		・学習計画書と振り返りシートを作成し、ルーブリックをもとに生徒自らが学びを調整できる指導を行なう。	B		
	社会に対する興味関心の向上	・生徒自らが授業の内容と現代社会の諸課題を結びつけ、主体的に学習に取り組める授業を展開する。	B	B	
		・ICT教材（ロイロノートなど）を活用し、生徒が共に学び合い、社会現象を多角的に捉える授業を展開する。			
	豊かな思考力・判断力・表現力の養成	・自ら課題を設定し、レポートを作成する経験を積ませる。 ・定期考査の設問において、思考力・判断力・表現力を問うものを取り入れる。	C	B	
		・定期考査において分野ごとの正答率を分析し、教員の授業改善につなげる。	B		

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
数学科	教員の授業力の向上	・長期休業中等に、教科内で教科指導研究会を定期的実施し、教員同士の授業スキルの向上を目指す。各研修や研究会への参加と内容の共有の充実を目指す。	B	B	・今年度は教科指導研究会の開催なし。次年度は新課程へ完全移行したこともふまえて、「確率統計」をメインに研究会を開催したい。評価基準に関しては、科の先生方の積極的な意見交換が行われ、観点別評価の改善を行うことができた。次年度は、テストにおける観点別の点数比率の調整と出題する問題の精査がすでに教科内で課題として上がっている。主体的な学習や協働的な学びの実践は意見の交換が行われていないので、教科指導研究会とあわせて議論していきたい。
	基礎・基本の充実	・授業内での演習や単元テスト、確認テストを計画的に行い、知識の定着を計るとともに、協働的な学びの実践を行う。	B	B	
	主体的な学習による思考力・判断力・表現力の養成	・授業内での主体的な学び（個人・ペアは問わない）から生まれる質問や対話によって、理解力の向上と数学的な論理力を養う。主体性評価の継続的検討を行う。	B	B	
	数学検定の利用による基礎知識の到達度確認	・数学検定を利用して、自己の基礎力の定着を確認する。	B	B	
理科	自然科学に関する興味関心の向上	・自然事象に関心を持ち、そこから課題を見だせるような各種指導・企画を展開する。	B	B	・今年度も、夏休み中に外部講師を招いてエネルギーに関する講義を行ったり、科学の甲子園への参加や天体観測会を企画したりするなど、授業外で科学への興味・関心を高めるための活動を積極的に開催した。しかし、生徒の参加は一部のみで留まった。次年度は、より多くの生徒が参加しやすい形で企画を実施できるよう、情報の発信の工夫や企画の定番化を進めていきたい。 ・また、専門理科の共通テストの難化に対応しきれていない現状がある。科として、外部の勉強会に積極的に参加し対応策を明確にし、次年度には足並みを揃えて指導できるよう努めたい。
		・観察・実験を行い、人間生活と関連づけて科学的に探究する力を身につける。	B		
	生徒の実態・理解度に応じた授業展開	・基本的な知識習得の徹底を図る。	B	B	
		・情報収集・課題を設定する力を養い、知識を活用する力を身につけさせる。	C		
主体的な学習を行いながら、思考力・判断力・表現力の養成	・観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し、発信する力を養う。	A	A		
保健 体育科	個人や集団の実態に応じた授業の展開	・昨年度から引き続き、生徒の実態に応じた授業を展開するために、使用する用具の工夫、ゲーム中のルールの変更などを積極的に行う。	B	B	・技能評価にかかる時間を大幅に短縮することができたことから、実践練習を充実させることができた。その結果、評価のための授業ではなく、各種目、本来の目的に近づけることができた。ただ、レベル別の授業展開は継続的に課題としてある。 ・生涯スポーツでは新たに「ヨガ」を導入した。生徒の反応はまずまずであったが継続的に導入するにあたっては課題が残る。現在は講師料を生徒から徴収しているがそれだけでは足りない年もある。その場合の対応策は今後、学校と相談しながらすすめていきたい。
	生涯にわたって運動に親しむ態度の育成	・保健指導、体育実技指導の両面から生徒の健康にアプローチしていく。 ・「生涯スポーツ」の見直し。体を動かすことの楽しさや、生涯にわたって運動に親しむ態度を身につけるための種目を変更し、ニーズにあった選択肢を設けながら授業を実施していく。	C	B	

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
芸術科	音・美・書それぞれの特性を活かした、授業の充実	・研修等を積極的に受講し、より生徒が楽しめる授業や学習評価のあり方を丁寧に検討する。ICT を利用した新しい教材や授業の開発をする。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT を利用した新しい教材や授業の開発を目指し、音楽室と書道室の設備を充実させたい。今後も安心安全を心がけ、教科の情報交換を密にし、生徒の実態に即した授業進度を心がけたい。生徒の興味関心がある教材の研究や、個人の能力・適性に応じた細やかな指導を今後も大切にしていきたい。非常勤講師の先生方含め、同時刻に授業をしていることもあり、なかなか教科会を全員で行うことが出来ない。情報を共有できるようにコミュニケーションを大切にしたい。
	自己肯定感の育成	・選択科として、生徒自身が興味関心をより深く追求できるような「できた」「楽しい」体験をつくる。	A	A	
	個人の能力・進路に応じた指導	・個人の能力、適性に応じた細やかな指導を配慮する。	A	A	
	科目の協力推進	・教科会を充実させ、評価基準や授業計画をできるだけ共有する。	B	B	
英語科	基礎学力の向上と定着	・「ときわ力」をはぐくむ授業を通し、各学年の Tokiwa Can-do 4 技能の基礎力定着をはかる。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートを含む観点別評価第三観点の評価材料や評価方法を改善し、生徒それぞれが自学方法の質を向上させながら学習に取り組むよう、さらに促せるようにする。 ・語彙力・文法力・英文解釈力を強化し、読解力・表現力を高める。 ・ICT 機器を使用し音読の正確さも向上させる。 ・ICT を効果的に用いて、丸暗記ではなく自分の言葉を用いて発表する力をさらにつけさせる。 ・英語検定取得のメリットを周知させ、受検者数を伸ばす。
		・効果的な振り返りシートを用いて、生徒それぞれが自学方法の質を向上させながら学習に取り組めるよう促す。	B		
	英語運用力の向上	・コミュニケーションの授業を中心に、音読活動等を通して読解速度を上げるとともに、語彙力も高める。	B	B	
		・表現の授業を中心に、基本となる文構造・文法事項を用いて英作文等を重ね、ペアワーク、プレゼンテーション活動等で実際に運用する。	A		
	自分の考え・感想を英語で表現する活動の充実	・ICT 機器を効果的に使用しながら、英語運用力向上のための活動で得た知識を活用し、自分自身の考えを述べる機会を設ける。	B	A	
		・ハリーエインリー高校とのオンライン英会話、DMMオンライン英会話等を通して、実際に日本人以外の人とのコミュニケーションで英語を活用しながら、互いの考えをやり取りすることに慣れ親しむ。	A		
英語検定等、資格試験チャレンジの奨励	・学習を通して培った英語力がどのようなレベルに達しているか自己分析と他者へのアピールの材料の 1 つとして、検定のアナウンスと受検のための後押しを行う。	B	B		

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
家庭科	生活に必要な基本的知識・技能の習得および生徒が主体的に取り組むことができる授業と適切な教材の提供	・生徒が主体的に取り組むことができる実践的な授業を展開し、適切な教材を提供する。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度より各単元の終了時に自己評価も兼ねた振り返りシートを取り入れた。今後も学習内容の定着と生活での実践につなげたい。 ・生徒の達成度に応じた指導を心掛けているが難しく、さらに方法を工夫していきたい。 ・次年度はさらに多くの実習を取り入れ、体験的に学習することや ICT を活用し、楽しみながら学習できるよう工夫を重ねたい。
		・生徒一人一人の進度や達成状況に応じた指導を行う。	B		
・ICTの効果的な利用方法を研究し、授業の改善を図る。		B			
	生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実・向上を図る能力と実践的態度の育成	・学習したことを生かし、自らの生活課題の解決を図ることができるよう、対話的な活動や振り返りを積極的に行い、実践的な態度を育成する。	A	A	
情報科	コンピュータや情報ネットワークを活用する知識や技能の習得	・アルゴリズムを表現する手段、プログラミングによってコンピュータや情報通信ネットワークの機能を使う方法や技能を身に付けさせる。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングなどの実習を多く取り入れた授業を展開していきたい。生徒の進み具合に注意しながら、論理的思考力の育成に尽力したい。また、PCスキルに大きな差があるため、苦手な生徒や欠席した生徒へのフォロー体制を充実させたい。 ・共通テスト受験対策を充実させたい。
		・コンピュータやネットワークを活用して、情報を適切に収集・処理・発信する基礎的な技術と技能を習得させる。	A		
	情報を正しく扱うためのマナーやルール理解および主体的に活用する態度の育成	・研究レポートの作成を通して、情報を収集し、必要な情報を利用する力を育成する。また、画像の利用を通して、著作権やマナーを理解させる。	A	B	
		・発表体験を通して、自分の考えをまとめ、主体的に相手に伝える力を育成する。また、グループワークを通して他の意見との比較をさせる。	B		

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
教務部	教務システム等の円滑な運用	・教務システム等の円滑な運用と作業の効率化を実現する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT を単なるツールではなく、校務の効率化や教育の質向上に向け、活用法や分析能力をさらに高めていくことを目指す。 ・成績不振生徒への学習支援体制の整備については教科面談の取り組みを通して実施してきたが、事後の生徒成績変動把握や向上するための方策を強化していく。
		・全教職員の共通理解と協力体制を構築し、教育活動の質の向上を目指す。	B		
	生徒の学力向上と全教員の指導力の強化	・各教科の観点別評価方法について把握し、有効に活用・運用していくための方策を検討する。	B	B	
		・模試分析等を通じた学習方法などのフィードバックを、学年担当・教科担当の教諭と連携して行う。	B		
		・教員研修等を企画・実施し、全教員の指導力の向上を目指す。	A		
生徒支援部	水戸で一番制服をきちんと着る学校	・定期的な駅、学校周辺の巡回を実施する。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・校内・校外での服装や行動についての生活指導は継続的に必要である。教員間の意識を共有させる工夫が必要。SNS 関連のトラブル、部活動内での友人トラブルが目立った。生活アンケート・部活動面談・クラス面談などは引き続き定期的にも実施していく必要がある。 ・生徒の安心・安全な学校生活を支援するため、引き続き、教職員・保護者・SC との連携を密にし、健康診断や教育相談も活用しながらの心身の健康の保持増進についてチーム・組織で取り組む。
		・全職員で朝の服装指導、テスト期間の校外巡回を行う。	A		
	生徒会との連携向上	・校則サミット、生徒会との意見交換会を実施する。	A	A	
	安心安全な校内環境の維持	・生活アンケートを実施し、アンケート結果から面談を実施する。	A	A	
	いじめ防止と迅速な対応	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃から健康相談等がしやすい環境づくりに努め、生徒の変化やサインを見逃さないよう対応する。 ・生活アンケート結果を学校全体で共有して、いじめ防止対策会議を通して対応する。 	A	A	
	生徒が心身ともに健康な状態で学校生活を送る支援の充実	・各健康診断を適切に実施し、生徒の健康状態を把握する。結果に応じて受診勧奨を行い、生徒の健康の保持増進に寄与する。	A	A	
		・保健日より・相談室日より、掲示物を作成し、生徒が主体的に心身の健康管理ができる力の醸成を目指す。	A		
	教育相談活動の充足	・スクールカウンセラーを活用し、生徒・教員の支援に繋げる。	A	A	
		・今年度もグループエンカウンター（1年生）やアサーショントレーニング（2年生）等を企画・実施し、生徒の社会的スキルを高める。	A		

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
入試 広報部	広報誌、学校案内パンフレットを通じた学校理解の促進	・パンフレット、T-color、チラシ制作のタイミングと効果を検証し、年間を通して広報活動に効果的な制作計画を検討する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットをはじめとする広報物は、中学校の動きの早まりに合わせて作成できている。それ以外の広報媒体は、どんなコンテンツが広報に利用できるのか検討することが課題である。 ・OSの内容を変革中である。今後は体験授業のあり方を考え直し、どうあるべきなのかを学校全体で共有したい。中学生向け説明会では、「ときわ力」に言及するようにした。 ・業務内容については、より効果的な分担を検討し、円滑な活動を目指したい。
		・パンフレットやポスターでこそ伝えることができる情報を精査し、H.P.やSNS等に移行できるものはそちらを活用する。	B		
	学校見学会および説明会	・オープンスクールと秋季学校説明会では中学生に本校の魅力が伝わるよう、内容を充実させる。	A	A	
		・進路や部活動の実績、学校行事の報告などの説明だけではなく、本校の教育理念を説明内容に盛り込み、他校にはない本校独自の魅力を伝える。	A		
	教員の円滑な連携と効果的活動の模索	・入試広報部の業務を明確に示し、部内で共有する。適切な役割分担を検討し、円滑な活動を目指す。	C	C	
		・入試広報部以外の教員も広報活動の一役を担えるよう、入試広報の活動内容を全教員と共有する。	D		
総務部	儀式的行事やその他学校行事の円滑な企画運営	・行事に関して前年度からの反省や課題を引き継ぎ、適正かつ円滑な運営を図る。また、各分掌との情報交換を取りながら適切な年間行事計画を立てる。	A	B	
		・総務部としての業務を明確化した上で、教務部を中心に他の分掌と共通理解を図りながら連携を密にする。	B		
	安心、安全な学校づくり	・昨年度実施した防災訓練を、さらに実践的な内容のものに変えるとともに、校舎の危険箇所や破損箇所の点検を確実にを行う。	A	A	
	入学準備プログラムの充実	・特別授業、入学予定者説明会を通して、常磐の学びや教育方針を理解してもらおうとともに、入学後の不安解消に繋げる。	A	A	

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
進路部	主體的かつ多様なキャリアビジョンの育成	・生徒や保護者、校内全体に向けた活発な情報発信を進める （新課程の大学入試情報・共通テスト分析・新傾向の出題等）	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 希望制の大学・企業・官公庁見学を複数回にわたり行えたのは収穫があった。海外大学進学内定者が出たことから、社会の変化に対応した進路指導を様々な場面で提供できる工夫をより凝らしていきたい。 3学年の国公立大学出願検討は、三者面談以前から濃密に行うことは出来たが、年内入試の拡大に伴う新機軸を次年度は創出したい。 法人内との連携・やり取りについて、より回数を増やすことを目指す。
		・進学後の人生設計の視座を持った指導を行う （キャリアガイダンスや希望制の大学見学・企業見学等）	A		
		・多様な価値観に基づいた進路情報の提供や企画を推進する （特に海外の学校進学を希望する生徒向けの講演会等実施）	B		
	進路実現に関する教員チームでの援助促進	・模試・定期考査分析や生徒の活動歴をもとに、年内入試ないし一般入試を見据えた「進路検討会」を定期的に行う	B	B	
		・進路部、教務部（学習指導部門）、学年教員や教科担当者と協働して、生徒のキャリア実現に向けた支援体制を整える	B		
学校法人内との教育連携の活性化	・常磐大学／常磐短期大学等との連携をさらに進め、生徒のキャリア学習に資する体験授業等を拡充する	C	C		
特別活動部	学校行事の充実	・ときわ祭において、生徒の自主的な行事運営を重んじ、教員は側面から支援する。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ときわ祭が毎年開催となり、生徒中心の運営を促進したが、予算に関わることや衛生や安全に関わる部分は教員中心であった。ときわ祭に限らず、行事運営において生徒を指導する機会を減らし、支援する機会を増やしたい。 生徒評議会が5年ぶりに復活したが、発信力は弱かった。来年度は生徒評議会から総会に議題を提案したい。委員会活動に関しては、生徒教員ともに放課後の時間確保が難しく、前年踏襲から脱却できなかった委員会が多く見られた。特別活動全般に言えることだが、放課後ゼミが始まる次年度は活性化がさらに難しくなるであろう。
		・クラスマッチを通して運動に親しむ態度を育み、クラスの団結力を高める。	A		
	生徒会活動の活性化	・毎月実施される生徒評議会を充実させる。	B	B	
		・生徒会活動に関する広報活動を充実させ、生徒会の「見える化」に取り組む。	B		
	部活動の充実	・生徒の自主性・協調性を育てる部活動になるよう支援する。	B	A	
		・学業との両立を可能にする体制づくりに努める。	A		
	委員会の活性化	・委員会便りを発行し、委員会からの情報を発信する。	C	C	
		・委員長会議を充実させ、改善案を話し合う機会を設ける。	C		

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への課題
研究 開発部	探究プログラムの進化と精選、評価指数の検討、教育機関や地域との連携	・地方行政と連携した課題解決型学習に取り組むことや、地域ボランティアなど、生徒の資質を向上できるようなプログラムの開発や運営を行う。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・受動的なボランティアが多い。本校独自のボランティアを開拓する。 ・生徒のルーブリックでは課題発見力、創造力、表現力の評価が低かった。「切り拓く力」の育成を目指したプログラムの作成をする。 ・国際教育の SNS アカウントでの情報の発信はできたが、探究部門での発信の頻度を向上させる。 ・外国の文化を理解するというレベルには達しなかった。再検討し、効果的なプログラムを実施する。 ・留学生に向けた、日本語ゼミを開講することができたが、さらなるサポートを検討したい。 ・貸出冊数等は倍増したが、教員主導感が否めない。生徒が自ら本を借り、知識を深められるような促進をしたい。 ・書籍を利用する授業プログラムを実施することができたが、継続的ではなかった。また、情報リテラシーの育成まで踏み込むことはできていないため、プログラムを深化させたい。
		・学校全体で育成する資質・能力であるときわ力を踏まえたルーブリックを活用し、本校の課題を検証し、ときわ力の向上を目指した授業プログラムを開発する。	B		
		・ SNS 等を利用して学校外への発信力を高め、本校教員の探究への理解を向上させることや、他校や外部機関とのつながりをつくる。	B		
	国際的視野をもった生徒の育成と留学支援	・ SDGs 活動や探究活動を通して、日本や諸外国の文化に対する理解を深める教育プログラムを推進する。	B	B	
		・本校生や受け入れた留学生に向けた、研修の実施や相談室の設置を通して、留学へのサポートを強化する。	C		
	書籍を媒体とした知の育成と図書館利用の促進	・教職員や生徒の要望を調査し、教職員や生徒の図書館の利用頻度や電子書籍を含めた書籍の貸出数を増進させる。	C	C	
・総合的な探究の時間で、専門書や新書などを活用する授業プログラムを展開し、生徒の情報モラルや情報リテラシーを育成する。		C			

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
1 学年	ときわ力の浸透と実践	・道徳的実践力の育成 気持ちのあるあいさつによって、心を通わせ、対話力を身につけさせ、相手や物事の本質をつかむ能力を育成する。あわせて、誠実で真摯な態度の重要性を理解させる。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒たちは「あいさつ」等の表面的な道徳的行動を気持ちよく行っている一方で、誠実な考え方に基づき判断し行動することを浸透させるまでには至っていない。また、困難さに立ち向かう力をはぐくむには相当の時間を要すると考えられる。生徒たちの明るさや朗らかさを大切にしながら、振り返りの習慣を強化し、生活面や学習面の経験を自らの成長につなげられる自立した人物の育成をより一層意識した取り組みを行う。 教員側からの働きかけはかなり行っているが、生徒自身の学習への意欲は十分とは言えない。調査や模試を軸に学習意欲を高める仕掛けをより充実させていく必要がある。 高校生活が無為に過ぎないように、生徒が自分の目標を意識しながら毎日の行動を記録する取り組みを入学当初から行っている。生徒自らが3年間を計画し、自己修正しながら過ごせるよう、キャリアガイダンス関連の充実力を入れる。
		・課題発見力の成長 学校行事や学年行事を円滑かつ満足度の高い状況にするため、課題と対策を考え、実践する機会を提供する。	A		
		・振り返る機会の充実 あらゆる教育活動を通して、結果に対する反省や分析を行うことの習慣化を図り、2年次以降に向けての対策およびその実行に向けての基礎作りとする。	C		
	基礎的な知識・技能の向上	・学習の基本は授業であることを認識させ、生徒自身が目的意識を持って、学習活動に取り組めるようにする。	B	B	
		・検定に挑戦するなど、自分の知識・技能の定着度合いを客観視できる機会を持つことを奨励する。	C		
	生徒の達成目標と自己実現に向けた進路選択	・生徒が高校生活における長期目標と短期目標を自覚し、振り返りを繰り返しながら遷がたどれるよう、記録をつけさせる。振り返りを通して課題や次の目標を立てるきっかけを作る。	B	B	
・キャリアガイダンスやオープンキャンパスへの参加を通して目標を設定し、自己実現に向けた進路の方向選択（文理選択）や学習到達目標の設定を行えるようにする。		A			
2 学年	授業の充実	・1つ1つの授業の価値を再認識し、学力向上へ向けて努力させる。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 最終学年として一人一人の未来へ目を向ける。 受験形態が様変わりする中で、新しい情報を正確に発信する。 資格取得に関しては、実学を重んじる本校としては学校全体で取り組む事だと感じている。（現状は科の担当者の業務） 学習時間を入力し、学習の定着をはかれたことは、生徒にとっても担任の先生にとっても自信となった。
		・DMM 英会話の有効活用	A		
		・探究活動を通して、様々な社会的事象に興味を持たせ、多様な価値観を身につけさせる。	A		
	学習習慣の更なる定着	・BLEND を活用した学習時間の定着化と学習内容の充実。	A	A	
		・定期考査、模試の有効な活用。	A		
		・資格取得を意識した計画、実践。	B		
	安心できる環境の構築	・担任を含む、教員面談の実施。	B	A	
		・修学旅行を含めた、行事の実践。	A		

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
3 学年	明確な目標に向かって自ら学力向上に努める	・BLEND の活用を日々の学習時間記録を軸に実践しながら、2 年間で培った自己マネジメントの実践ができるようにする。	B	A	
		・スタディサプリの動画や、模擬試験の過去問等を活用しながら共通テスト受験を意識した受験生としてふさわしい学習の質の確保を支援する。	A		
	協働することの強さを知る	・スタディールームをはじめとする各種学習環境の利用促進を軸に、団体戦としての受験の雰囲気を醸成する。	A	A	
		・校外での活動を積極的に紹介することで、社会の中で生きる協働性に触れる機会を広く知ることができるようにする。	B		
	自己にとって最適な進路実現をする	・模擬試験のデータを学年団で共有しつつ、それを活用しながらの個人面談を軸に、生徒にとって最適な進路選択を支援する。 ・より良いかたちでの共通テスト全員受験を目指し、学年団で施策に関する情報共有をし、生徒にフィードバックできるようにする。	A	A	

判定規準 A:大変よくできた B:よくできた C:ふつう D:やや不十分 E:不十分